

パラウク・ワ語における語類

その他（別言語等） のタイトル	Word Class in Parauk Wa
著者	山田 敦士
雑誌名	北海道言語文化研究
巻	15
ページ	39-48
発行年	2017
URL	http://hdl.handle.net/10258/00009524

パラウク・ワ語における語類 *

山田 敦士

Word Class in Parauk Wa

Atsushi YAMADA

要旨 形態法に乏しい、いわゆる孤立語タイプの言語においては、従来の形態統語論の特徴に基づく語カテゴリーを与えるのが困難である。その一方で、句・節などの形成にかかわる意味統語論の特徴を共有する語類を認めることは可能である。この二つの語類はともに「品詞」と呼び做わされるが、そもそもの立脚点が異なる。しかし、それでもなお両者に相通じるところがあるというのはたいへん興味深い。こうした背景を念頭に、本稿では、孤立語タイプの類型特徴を強く示すパラウク・ワ語（モン・クメール語族、中国雲南省）の事例を取り上げ、その具体的な分類の基準や手順を示す。その上で、動詞と名詞を例に、語類を考えることの妥当性を示す。最後に、こうした語の分類にかかわる類型論的な問題点（同音異義形式の扱い）について論ずる。

キーワード：パラウク・ワ語、孤立語、語類

1. はじめに

形態類型論的に孤立的とされる言語（isolating language）においては、曲用や活用といった形態統語論の特徴による語のカテゴリー化が不可能である¹。また、英語の-nessや-lyのような、語の音韻的構成とその語のもつ機能の対応関係を期待することもできない。しかし、こうした事実があるからといって、孤立的言語において語の分類自体が意味をなさないわけではない。孤立語の言語記述においても、語カテゴリーが様々な文法の説明原理となっている実感がある。こうした実感を理論化する、孤立語に即した文法原理の構築が不可欠である。

以上の状況にかんがみ、本稿では、孤立的言語における語カテゴリーの一事例として、パラウク・ワ語における品詞分類について考察する²。以下ではまず、先行記述にみられる形態・意味・機能の3点から総合的に規定する方法を概観し、その問題点を指摘する。これに対し、

¹ パラウク・ワ語における共時的な語形成法については山田（2016）に詳しい。

² パラウク・ワ語はモン・クメール語族パラウン語派に属する言語である。中国雲南省西南部からミャンマー連邦シャン州東部にかけての一帯を中心に、タイ王国北部にかけて広く分布する。話者は中国の公定民族の一つである佤（ワ）族の一支系、自称パラウク（[pə.raok ~ pə.yaok]）の集団である。本稿では以下の音韻表記を用いる。

子音：p, ph, b, bh, t, th, d, dh, c, ch, j, jh, k, kh, g, gh, ʔ, m, mh, n, nh, ɲ, ɲh, ŋ, ŋh, s, h, v, vh, y, yh, r, rh, l, lh

母音：i, u, e, ɛ, ɔ, ɔ̃, a, ɔ̃

超分節素：非弛緩（無標） / 弛緩（母音に下線で表示）

意味をなるべく排除すべきという立場から、語（品詞）相互の範列的な対立によってカテゴリーを規定する新たな方法を提案する。こうした分類の妥当性を検証するために、動詞と名詞を取り上げ、区別の意義を述べる。最後に、同音形式の問題に言及し、語彙体系を記述する際の課題について指摘する。

2. 先行研究における品詞分類

パラウク・ワ語の文法記述には、周・顔（1984） 黄・王（1994） 赵・赵（1999）などがある。しかし、それぞれの記述内容には本質的な違いが存在せず、先行研究の継承が基本姿勢であるように見える。これは赵・陈（2006）や赵・安（2014）など、教育・学習の立場からの文法記述においても同様である。そこで本稿では、初期の文法記述である周ほか（1984）を代表例とみなす。

周ほか（1984:33-73）では、語を名詞（名詞）、量詞（助数詞）、数詞（数詞）、代詞（代名詞）、動詞（動詞）、状詞（連用修飾詞）、副詞（副詞）、介詞（前置詞）、連詞（接続詞）、助詞（助詞）、叹詞（感嘆詞）の12のカテゴリーに分類している。

表 1. 周ほか（1984）における語類³

品詞名	特 徴
名詞（名詞）	数量詞句の修飾を受ける。一部に重複するものあり。主語、目的語、繫辞補語、連体修飾語として機能する。
量詞（助数詞）	重複ができない。数詞とともに用いられる。
数詞（数詞）	量詞とともに用いられる。
代詞（代名詞）	主語、目的語、繫辞補語、連体修飾語になる。
動詞（動詞）	動作行為などを表す。副詞による修飾が可能。肯定疑問文が可能。アスペクト助詞と結合する。述語、連体修飾語、補語として機能する。
形容詞 （形容詞）	副詞による修飾が可能。肯定疑問文が可能。一部はアスペクト助詞と結合する。重複 ⁴ が可能。述語、連体修飾語、補語として機能する。
状詞 （連用修飾詞）	性質、状態などの意味を表す。動詞、形容詞を修飾する。連用修飾語として機能する。
副詞（副詞）	基本的には連用修飾語として機能するが、補語、述語として機能することもある。一部に単独回答が可能なものもある。
介詞（前置詞）	単独では生起しない。常に前置詞句の一部として用いられる。
連詞（接続詞）	語と語、句と句を結合する機能をもつ。
助詞（助詞）	（共通した統語特徴の記述なし）
叹詞（感動詞）	他の語と統語的關係をもたない。

³ 中国における言語学用語のうち、特殊なものについて、次のように改めてある。

宾语→目的語、表语→繫辞補語、定语→連体修飾語、状语→連用修飾語、情貌助詞→アスペクト助詞

⁴ ここでの「重複」とは形態論的なものではなく、統語的な繰り返しのようである。動詞においても同様の繰り返しが認められる。

表 1 にみられるように、それぞれの語類は、統一的な基準による分類ということではなく、形態・意味・機能の 3 点からの特徴記述というかたちで規定されている。なかでも、各類の特徴記述として文法機能への言及が多い。そこで、表 1 をもとに、品詞と文法機能との対応関係を以下に示す。

図 1. 語類と文法機能の関係（の一部）

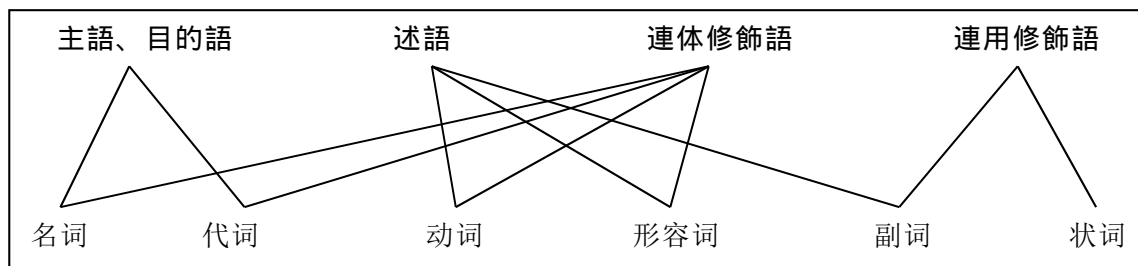


図 1 より、語類と文法機能との関係は一義的でないことがわかる。例えば、名詞（名詞）と代名詞（代詞）、動詞（動詞）と形容詞（形容詞）の異なる特性を示すことができない。つまり、従来おこなわれてきた文法機能を根拠とした語のカテゴリー化は困難であるといえ、別の分類原理を示すことが不可欠である。

3. 山田（2007、2009）における品詞分類

言語記述という立場からは、明示性を欠く意味的基準をできるだけ排除することが重視される。そこで山田（2007、2009）では、上記の周ほか（1984）の分類を再整理するかたちで、表 2 に示す三つの基準を順次適用し、四つの品詞（動詞、名詞、副詞、助詞）に帰納することを提案している。

表 2. 品詞分類の基準

基準	：単独で文を構成できるか否か
基準	： <i>san</i> （非現実法）、 <i>hoik</i> （完了）など動詞助詞と結びつくか否か
基準	：動詞の項になるか否か

表 3 は、表 2 の から の三つの統語基準を満たすか（ ）満たさないか（×）による四つの品詞を規定したものである。

表 3. 統語基準と品詞分類

品詞名	下位類			
動 詞	動作動詞、状態動詞 ⁵ ...			×
名 詞	固有名詞、代名詞、数名詞...		×	
副 詞	接続副詞、感嘆副詞...		×	×
助 詞	動詞助詞、類別助詞、文末助詞...	×	×	×

三つの基準のうち、基準 は自立性の観点から自立語と非自立語を区別するためのものである。自立語のうち、副詞とは、慣用句的なもの（*khəmməhnan*：しかし）、いわゆる感動詞の

⁵ いわゆる形容詞は分類する積極的根拠がない。動詞の一部として扱われる。

類、重複形式によるもの (*cuicui?*: 少々) というやや異質の語類である。これを除いた動詞と名詞が、の基準によりそれぞれ規定される。

3.1. 動詞と名詞の区別

表 2 におけるの基準は、他品詞との範列的な関係の一部を取り上げたものである。その正当性を示すため、表 4 に動詞、名詞と各品詞（助詞に関しては代表的な五つの下位類を含む）との連辞的な共起関係を示す。は連辞的な共起が可能であること、×は共起が不可能であることを表わす。そのうえで、以下に（イ）から（チ）について、それぞれ事例を示す⁶。

表 4. 動詞 / 名詞と他品詞の共起関係

	(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ホ)	(ヘ)	(ト)	(チ)
A \ B	動詞	名詞	副詞	動詞助詞	前置助詞	従属助詞	名詞助詞	文末助詞
動詞	×				×	×	×	
名詞			×	×				×

イ) A [*動詞 / 名詞] × B [動詞]

(1a) のように、*muih* 「愛する」に *to* 「走る」が直接後置されることはない。「走るのが好き」の意味であれば、(1b) のように句のかたちをとる必要がある。一方、(2) の *pui* 「人」には *to* 「走る」を後置することが可能である。

- 1a) ?? (*nɔh*) *muih* *to*
 (3sg) 愛する_A 走る_B
- 1b) (*nɔh*) *muih* *ti?* *to*
 (3sg) 愛する_A 自分 走る_B
 「(彼は)自分が走るのが好きだ」
- 2) *pui* *to*
 人_A 走る_B
 「走る人」

ロ) A [動詞 / 名詞] × B [名詞]

(3) の *muih* 「愛する」(4) の *mɛ?* 「母」とともに名詞 *ʔai* 「(人名)」を後置することが可能である。

- 3) (*ʔɔ?*) *muih* *ʔai*
 (1sg) 愛する_A (人名)_B
 「(私は)アイが好きだ」

⁶ 機能的な語に関して、次の略号を使用する。(完了): 完了の意味を表す動詞助詞、(疑問): 疑問の語気を表す文末助詞、(共同): 共同者を表す前置助詞、(原因): 原因を表す前置助詞、(限定): 限定的意味を表す文末助詞、(人名): 人名、(双数): 双数の意味を表す名詞助詞、(道具): 道具を表す前置助詞、(非現): 非現実法の意味を表す動詞助詞、(比較): 比較を表す前置助詞、(並行): 時間的重複を表す接続助詞、(並列): 並列の意味を表す接続助詞、1: 1 人称、2: 2 人称、3: 3 人称、sg: 単数、du: 双数、pl: 複数

- 4) *mɛʔ ʔai*
母_A (人名)_B
「アイの母親」

八) A [動詞 / *名詞] × B [副詞]

(5) の *sɔm* 「食事する」は副詞 *cuicuiʔ* 「少々」の後置が可能である。一方、(6) の *ʔup* 「飯」には副詞 *cuicuiʔ* 「少々」を後置させることができない。

- 5) *sɔm cuicuiʔ*
食事する_A 少々_B
「少々食べた」

- 6) * *ʔup cuicuiʔ*
飯_A 少々_B

二) A [動詞 / *名詞] × B [動詞助詞]

(7) の *ʔih* 「食べる」には動詞助詞 *saŋ* 「(非現実)」の前置が可能である。一方、(8a) の *miaŋ* 「役人」には動詞助詞 *saŋ* 「(非現実)」が前置できない。(8b) のように、動詞を介在させる必要がある。

- 7) *saŋ ʔih*
(非現)_B 食べる_A
「食べるだろう / 食べただろう」

- 8a) * *saŋ miaŋ*
(非現)_B 役人_A

- 8b) *saŋ mɔh miaŋ*
(非現)_B である 役人_A
「役人になるだろう」

ホ) A [*動詞 / 名詞] × B [前置助詞]

(9a) の *goih* 「倒れる」単独では前置助詞 *kah* 「(原因)」を従えることができない。(9b) のように、句の形式 (*goih tiʔ* 「自分が倒れる」) にする必要がある。一方、(10) の *naiŋ* 「戦争」は前置助詞 *kah* 「(原因)」を単独で従えることができる。

- 9a) * *yiam kah goih*
泣く (原因)_B 倒れる_A
- 9b) *yiam kah goih tiʔ*
泣く (原因)_B 倒れる_A 自分
「自分が転んで泣いた」
- 10) *yum kah naiŋ*
死ぬ (原因)_B 戦争_A
「戦争で死んだ」

へ) A [*動詞 / 名詞] × B [従属助詞]

(11a) の *tiat* 「蹴る」は従属助詞 *mai* 「(並列)」によって *tok* 「叩く」と並列させることができない。「叩く」と「蹴る」ことが平行的におこなわれる状況は(11b)のように、節の並列を表わす従属助詞 *khom* によって、*tok ʔai ni* 「アイがニーを叩く」と *tiat tiʔ* 「自分(アイ)が(ニーを)蹴る」というかたちで示すしかない。一方、(12) の *si.vai* 「トラ」と *tam* 「カニ」は従属助詞 *mai* 「(並列)」によって並列させることができる。

- 11a) * *tok mai tiat*
叩く (並列)_B 蹴る_A
- 11b) *tok ʔai ni khom tiat tiʔ*
叩く (人名) (人名) (並列)_B 蹴る_A 自分
「アイがニーを、蹴りながら、叩いた」
- 12) *si.vai mai tam*
トラ (並列)_B カニ_A
「トラとカニ」

ト) A [*動詞 / 名詞] × B [名詞助詞]

(13) の *ʔih* 「食べる」は名詞助詞 *keʔ* 「(双数)」を後置することができない。一方、(14) の *ʔai* 「(人名)」には名詞助詞 *keʔ* 「(双数)」を後置することができる。

- 13) * *ʔih keʔ*
食べる_A (双数)_B
- 14) *ʔai keʔ*
(人名)_A (双数)_B
「アイたち2人」

チ) A [動詞 / *名詞] × B [文末助詞]

(15) の *ʔih* 「食べる」には文末助詞 *laih* 「(疑問)」を後置することができる。一方、(16a) の *mian* 「役人」には文末助詞 *laih* 「(疑問)」を後置することができない。(16b) のように、動詞を従える必要がある。

- 15) *ʔih laih* — *ʔih*
食べる_A (疑問)_B 食べる
「食べたのか? — 食べた」
- 16a) * *mian laih* — * *mian*
役人_A (疑問)_B 役人
- 16b) *mɔh mian laih* — *mɔh*
である 役人_A (疑問)_B である
「役人なのか — そうだ」

以上のような前後の語との統語的分布を基準とする分類法は、膠着語における接辞等による共起制限に、レベルこそ違うものの、通じるところがある。孤立語における語類、少なくとも自立語に関する限りは、このような範列的な類として規定することが有効ではないかと考える。

3.2. 品詞性の転換について

上記のように、パラウク・ワ語においては、動詞と名詞は異なるカテゴリーとして認識される。両者の区別が重要である傍証として、品詞性の転換に関わる違いを指摘しておく。

パラウク・ワ語においては、動詞から名詞への転化のみが可能である。以下に、形態法と統語法それぞれにおける品詞性の転換について述べる。

(A) 形態法による転換

パラウク・ワ語の動詞の一部は、接辞法による名詞への転換が可能である。(17)(18)は同一語根が想定される名詞と動詞のペアである。

- | | | | |
|-----|-------------|--------------|------------------------|
| 17) | <i>laun</i> | <i>glaun</i> | (< *Ng- <i>laun</i>) |
| | 高い | 高さ | |
| 18) | <i>tin</i> | <i>din</i> | (< *Ng- <i>tin</i>) |
| | 大きい | 大きさ | |

(17)(18)では*Ng-のような接頭辞によって、状態動詞からその程度を表わす名詞が派生されるとみなせる(山田 2007)。しかし、例えば *tia*k「小さい」のようにこうした程度名詞のペアをもたない状態動詞も存在する。こうした名詞転化機能は化石化しており、すでに生産性を失っていると考えられる。

ところで、(19)(20)では動作動詞とそれと関係する名詞のペアである。

- | | | |
|-----|------------|------------|
| 19) | <i>pih</i> | <i>bih</i> |
| | 掃く | 箒 |
| 20) | <i>tep</i> | <i>dēp</i> |
| | 蓋する | 蓋 |

これらは程度名詞ではなく、動作に関連する道具名詞の派生である。(19)(20)の事例が(17)(18)と統一的に扱えるのであれば、*Ng-は品詞性そのものの転換機能をもつと一般化できる可能性がある。さらに用例の収集をすすめることで、動詞と名詞のカテゴリーに対する通時的分析が可能になるかもしれない。

(B) 統語法による転換

パラウク・ワ語の動詞句は、形式名詞 *pa* の前置により、その内項を示すかたちでの名詞句・名詞節化が可能である。

- | | | |
|-----|--------------|------------|
| 21) | <i>pa</i> | <i>ʔih</i> |
| | もの | 食べる |
| | 「食べるもの(物/者)」 | |

- 22) *pa* *ʔih* *hɔʔ*
 もの 食べる 漢族
 「漢族が食べるもの」
- 23) *pa* *saŋ* *ʔih* *kah* *taiʔ*
 もの (非現) 食べる (道具) 手
 「手で食べようとするもの(物/者)」

(21)(23)は文脈により、主語項または非主語(目的語)項の両方を示すかたちでの名詞節化が可能である。例えば(21)では、主語項を指す「食べる人」と非主語項を指す「食べる物」の両方の解釈が可能である。一方、(22)では文脈上、主語項を示すかたちでの解釈(「漢族を食べる人」)が困難である。そのため、非主語(目的語)項を示すかたちでの名詞節化(「漢族が食べる物」)と一義的に解釈される。

以上のような品詞性の転換の状況から、パラウク・ワ語においては、動詞と名詞は分化した語類として認めることが妥当である⁷。

4. 終わりに

本稿では、相互の範列的な関係から語類を規定する方法を提案した。こうした語類はパラウク・ワ語の諸文法現象の説明において便利であり、他言語における「品詞」分類に相当するものとして認める価値がある。

一方で、孤立的言語ならではの悩みも存在する。「単音節 = 1 形態素 = 1 語」という対応関係の強い言語においては、語の音節構成上の制約から、任意の音韻形式が広い意味・機能のカバーするという現象がみられる。本稿のように統語的分布によって語のクラスを規定しようとする場合、必然的に、これらを同音異義形式として処理することになる。このような同音異義の関係は、自立語と自立語、自立語と非自立語、非自立語と非自立語のすべての場合に、少なからずみられる現象である。問題となる形式を太字にて示す。

- 24a) *saŋ* *lɬeʔ* 【動詞】
 (非現) (雨が)降る
 「(雨が)降りそうだ」
- 24b) *liɬ* *lɬeʔ* *tiŋ* 【名詞】
 下りる 雨 大きい
 「大雨が降った」
- 25a) *kaiŋ* *ʔan* *hɔik* *hɔik* 【動詞】
 仕事 あれ (完了) 終わる
 「その仕事は終わった」

⁷ 動詞と名詞の違い(分化の度合い)は、言語間で異なる可能性がある。山田(2008)では、本節(B)で述べる有標的な品詞転換のほか、述語性や補文化、限定性の点からパラウク・ワ語と漢語の事例を対照し、漢語に比して、統語的また機能的に分化していることを指摘している。

25b) *hoik hoik ʔai* 【助詞】

(完了) 来る (人名)

「アイがやってきた」

26a) *ʔai tɛm khaiŋ maiʔ* 【前置助詞】

(人名) 低い (比較) 2sg

「アイはあなたより背が低い」

26b) *keʔ ʔot mai kuiŋ tiʔ khaiŋ* 【文末助詞】

3du 住む (共同) 父 自分 (限定)

「彼ら二人は父と暮らすよりほかなかった」

(24)では *lɛʔ* という形式が自立形式である動詞と名詞、(25)では *hoik* という形式が自立形式である動詞と非自立形式である助詞、(26)では *khaiŋ* という形式がともに非自立形式である前置助詞と文末助詞という異なる語類として機能する。このように、統語分布の観点から分類をおこなうことで、意味的に近い関係にある存在に対し、二つの異なる品詞と認定することになる。こうした同音異義語は相当数にのぼるとみられ、語彙体系の記述においてたいへんな負担である。品詞というカテゴリー化は文法原理の解明のためであるが、一方で話者の実感と相当に乖離したものになることは否めない。教育や学習など、話者が関わる文脈においては必ずしも便利ではない。

また、例えば(25)や(26)などにおいて想定される、文法化をはじめとする意味機能の転化の様態が見えにくくなることも弱点である。今後の課題として、共時的に異なる語彙として記述することとは別に、文法化の通時的傾向についての記述をすすめることが不可欠である⁸。

謝辞

* 本稿は日本言語学会第136回大会でのワークショップ「言語の構造的多様性のなかでの品詞分類」(企画者:中山俊秀)における報告をもとに、新規データによる確認および加筆修正をおこなったものである。本稿で用いるデータは、筆者自身の調査によって収集されたものである。調査に協力してくれた協力者の方々に謝意を示したい。なおデータの補充および再度の分析に際し、次のJSPS科研費による助成を受けた。

基盤研究(C)「漢語語彙史における複音節化現象の総合的研究」(代表者:松江崇)(課題番号:25370454)

基盤研究(B)「言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明」(代表者:新谷忠彦)(課題番号15H05154)

⁸ 一方、このような音韻形式に対し、多義語的な扱いをする立場もありうる。中国語における「兼類」(形名詞、動名詞など)というような認め方はこれに属する。相原(1996:138)では兼類の一例として「報告」などを挙げている。

你做个报告,把情况报告一下。

「報告書を作って、様子を報告してくれ」

前者は「報告書」という意味の名詞、後者は「報告する」という意味の動詞である。2音節の語にこのような振る舞いの語が多いようである。また、無品詞論という考え方はこの延長線上にある考えといえる。

参考文献

- 相原茂 (1996) 「中国語の品詞分類」『国文学：解釈と鑑賞』1月号、至文堂、134-139
- 黄同元・王敬骝 [Huang, Tongyuan・Wang, Jingliu] (1994) 「佤语概述」、王敬骝・张化鹏・肖玉芬编『佤语研究』、云南民族出版社、1-38
- 山田敦士 (2007) 「パラウク・ワ語」『文法を描く：フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ』2、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、259-284
- (2008) 「孤立的言語における名詞と動詞の相通性：中国語とパラウク・ワ語の対照から」『アジア・アフリカの言語と言語学』3、61-75
- (2009) 『パラウク・ワ語記述文法』北海道大学博士論文
- (2016) 「パラウク・ワ語における共時的な語形成」『北海道言語文化研究』14、11-20
- 赵富荣・陈国庆 [Zhao, Furong・Chen, Guoqing] (2006) 『佤语基础教程』、中央民族大学出版社
- 赵岩社・安晓红 [Zhao, Yanshe・An, Xiaohong] (2014) 『佤语教程』、云南大学出版社
- 赵岩社・赵福和 [Zhao, Yanshe・Zhao, Fuhe] (1998) 『佤语语法』、云南民族出版社
- 周植志・颜其香 [Zhou, Zhizhi・Yan, Qixiang] (1984) 『佤语简志』、民族出版社
- 朱德熙 [Zhu, Dexi] (1982) 『语法讲义』、商务印书馆

執筆者紹介

氏名：山田敦士

所属：日本医療大学保健医療学部

E-mail：a_yamada@nihoniryo-c.ac.jp / a.yamad@gmail.com